



読書活動への扉を開く！

N o 95

桑村小学校令和6年2月14日 文責 渡邊

静岡県定着度調査(国語科)から見えたこと!! 豊かな読書経験が高い「読解力」へとつながっていく

先日、令和5年度の静岡県定着度調査(国語科と算数科)の分析と考察を本校で行いました。そこから見えてきたことは、小学校低学年で国語科の読解力がとてもよく定着しているということです。

第1学年の国語科の問題は、「聞くこと」、「漢字の読み」、「平仮名での表記」、「漢字の筆順」、「助詞の使い方」、「つながりのある言葉」、「句読点の打ち方」、「文を書く」、「文章を読む」です。

本校第1学年児童は、どれも定着している結果でした。そうした中、県の平均と比較したとき、「文章を読む」の「語句の意味を文脈に即して理解する」が34.8ポイント、「文章中の重要な語や文を選び出す」も34.1ポイント高くなるという結果でした。問題文は説明的文章で、第1学年の発達段階ではそれなりに読み応えのある内容のものでした。

次に、第2学年の国語科の問題をみてみましょう。問題は「聞くこと」、「漢字の読み」、「漢字を書く」、「片仮名での表記」、「漢字の筆順」、「主語と述語の関係」、「助詞の使い方」、「句読点、かぎの使い方」、「文を書く」、「文を読む」で、第1学年より問題が高度なものになっています。

第2学年児童もどの領域も定着している結果の中、「文章を読む」の領域で高い定着を見せました。問題文は物語文でこれもなかなか読み応えのある内容でした。そうした中、「場面の様子の大体を捉える」の2つの問題で、33.5ポイントと46.8ポイント高くなるという好結果を得ました。また、「登場人物の行動を読み、書く」問題も10.9ポイント高い結果となりました。

第1学年児童と第2学年児童の共通するところは、とてもよく読書をしていることにあります。静岡県下の多くの小学校でも読書活動に励んでいることが予想されますが、どこが違うのでしょうか？それは、本校の児童について、読書が学校生活の一部になっていることにあるように思われます。

ある日の午後、第2学年の国語科の授業を行うために、私は2年生の教室に向かいました。清掃を終えた子供たちは次々に教室へと入ってきます。するとその後、そこに驚くべき光景が広がっていくのです。席に着いた子供は、机の横に掛けてある図書バッグから本を手に取り、当たり前のように読み始めたのです。本校では、「読書の時間」を朝の時間帯と昼の時間帯に曜日ごとに設定しているのですが、そうしたことに関係なく読書を楽しむ児童の姿がそこにはあったのです。校長として、とても感動したことを今でも覚えています。



【2年生図書バッグ】

教師から強制的に読書をやらされている状況では、子供は読書を楽しむことなどできるわけがありません。子供が読書を「楽しい」と感じる経験の積み重ねが、本物の読書体験となるのでしょうか。

本校では、1年生の教室でも同じような光景が見られます。教師の指示がない中、図書バッグを大切に抱えながら、二階にある学校図書館へと向かうのです。そして、本を返し終えた子供から順に次に読む本を選び、また教室へと戻るのです。席に着いた子供は、机の上に本を広げ、嬉しそうに本を読み始めます。それが当たり前となっていることが本校児童のすごいところです。読書活動に関して、教師の指示など誰も待っていません。自分で考えて行動することができるのです。

こうしたことは自然にできるようになったわけではありません。大切なことは、「読書が楽しい」という思いを子供と教師が共有することです。こうした教室風土、いや学校風土が子供の読書経験となり、高い「読解力」へとつながっていくのではないかと思います。

今回の定着度調査(国語科)の分析と考察から見えたことは、小学校低学年からの豊かな読書経験は、「読解力」を育成する視点からもとても有効であることが検証されたように思われます。

